

ソウル女子大学の設立者・高鳳京博士

コウ
フン
キョウ

金 有淑

(ソウル女子大学教授)

と同志社

ソウル女子大学の設立と教育理念

ソウル女子大学は朝鮮戦争が終わって間もない一九五六年に設立された。大学の設立を主導した大韓基督教・長老会は、日本植民地下の朝鮮の近代化のためには、女性高等人力の養成がなによりも必要であることを早くから察知し、大学設立の準備をしてきた。しかし植民地下での状況、その後の米軍政期、つづく朝鮮戦争のような社会的混乱のなかで、女性高等人力を養成する機関を設立することは容易ではなかった。だが、学校設立を主導してきた先覚者の知識人たちは、多くの困難にもかかわらず、それを実践に移し、やがてキリスト教精神に基づいて、「智・徳・術を兼備した女性高等人力養成」という教育理念を有する女子大学を設立するに至ったのである。現在、ソウル女子

大学は、「人間性を重視する大学」「国際人を育てる大学」「実践する信仰人を育てる大学」という教育目標に基づき、韓国最高水準の学部中心の高等教育機関を目指している。このような教育理念は、言い換えれば、キリスト教精神に立脚した人間教育を基に、知識と技術の両方を兼備した均衡のとれた人間を養成することを意味する。

設立者高鳳京

ソウル女子大学の歴史と教育理念は、韓国の先覚者の女性知識人として、犠牲と奉仕の精神を自ら実践してきた初代学長・高鳳京博士の生涯と教育哲学にその原点を見出すことができ。高鳳京は一九五八年四月、ソウル女子大学の初代学長に選出され、学校の基礎を築いた人である。韓国初の女性社会学博



1960年代のソウル女子大学のキャンパス

士であり、篤実なクリスチャンであった彼女は、韓国の長老会キリスト教系の女性知識人のなかでも最もすぐれた教育者としての資質、奉仕と犠牲の精神、そして崇高な教育哲学の持ち主として知られている。

高鳳京は植民地時代以前からいち早く西洋の学問に接した知識人家庭に育った。民族の将来を導いていく女性としての資質と実力を備える上で、彼女に多大な影響を与えたのは、父親であった。彼は、娘が将来、無知蒙昧の韓国の女性たちの指導者となることを望んだ。彼のこのような考えは彼女に計り知れない影響を及ぼし、立派な女性指導者になるという夢を幼い時から抱かせた。彼女の少女時代、韓国社会における女性の地位は、「文書のない奴隷」ということばがあるほど低かった。高鳳京は、そのような状態に置かれた韓国の女性たちを解放することこそが自らに与えられた使命と受け止めた。

強烈な民族啓蒙意識の持ち主だった父親の影響を強く受けた高鳳京は、植民地下の韓国民族が再び立ち直るためには、世界の進んだ学問と知識を習得し、それを教育の機会を与えられなかった人々と分かち合うべきであると考えた。幼い時から外国留学の夢を育んだのもそのためであった。キリスト教的信仰心に基づく愛国心、積極的な生き方、そして教育の機会すら与えられていない貧しく不幸な人々に対する奉仕の精神は、高鳳京の思想だけでなく、ソウル女子大学の教育理念にそのまま受け継がれている。

日本留学と同志社

高鳳京は韓国の京畿女子中学校を卒業した後、十五歳になる一九二四年に日本へ渡って同志社女子専門学校に入学、英文学を学びながら七年余りに及んだ日本での生活をはじめた。彼女が日本留学を決心したのは、植民地宗主国であった日本の文化と生活を体験しながら、女性指導者としての実力を備えるためであった。彼女が同志社大学を選んだのは、この大学が日本の近代化に一翼を担ったキリスト教的伝統を持つ名門大学であったからである。キリスト教的精神にあふれる開放的な同志社大学に通いながらも、彼女は民族的誇りを失わず、誰よりも熱心に学業に取り組んだ。民族意識のとりわけ強かった彼女は、日

本留学時代だけでなく、その後も日本人と文通する時は必ず英語を使用した。このような彼女の行動に対して、はじめは戸惑いを感じていた友人や知人たちも、民族的自尊心を貫かんとする彼女の強い意志をやがて理解し、それを尊重してくれたという。

高鳳京が植民地からの留学生でありながらも誇りを失うことなく、日本の生活に溶け込むことができた背景には、民芸研究家・柳宗悦の影響があった。彼はクリスチャンとして、植民地下の韓国の状況に誰よりも深い理解を示し、韓国に対する日本の植民地支配を強く批判した良心的な知識人であった。当時同志社女専の教授であった彼は韓国人学生たちに親切に接し、勇気を与え、多くの便宜をとり計らってくれた。発展的な日韓関係を築く上で一抹の希望を与えた人物こそ、ほかならぬ柳宗悦であった。

高鳳京は学業以外にも、学べる機会のあるところには熱心に足を運び、新しい知識を吸収した。当時外国との学術交流の盛んだった同志社大学は、探求心に燃える彼女の情熱を満たし、高い教養と広い視野を身につける上で、最適の環境であった。ここでの経験は、彼女が後にソウル女子大学を設立する際、開放的で国際的な学風を作り上げる上でも大きな影響を与えた。日本留学時代、彼女は日本の社会事業機関と、それらの機関が展開する社会運動を直接観察し、体験するために、当時「東洋の聖者」と称えられていた賀川豊彦をしばしば訪問し、彼の信仰と事業を学んだ。

博士高鳳京の日記

日本留学時代、高鳳京が最も熱心に奉仕したところは、韓国教会だった。当時京都の貧しい韓国人たちが多く住んでいた地区には、韓国人だけが通う教会があった。彼女はその教会の日曜学校で長い間奉仕をしながら、在日韓国人たちに韓国語と韓国の文化を教えた。当時同志社大学には、後に韓国の指導者となった人たちが多く学んでいたが、これらの知識人たちの交友を結ぶことができたのも、この日本留学時代のことであった。さらに、彼女は教員資格証を、そしてアメリカ留学に備えてYMCAでタイプライターの資格を取得した。同志社女子専門学校を修了した高鳳京は、同志社大学に進み、法学を学んだ。そして、日本での七年間の留学生生活を終えた後、アメリカ留学を決心し、奨学金を受けてアメリカへ向かった。

植民地という暗鬱な時代状況にもかかわらず、高鳳京はキリスト教的召命意識と民族的誇りを持った女性知識人として、時代に先駆けて走りぬいていった女性であった。キリスト教的召命意識に加えて、祖国への強い思い、教育を受けることもなく抑圧の生涯を生きるほかなかった女性たちに対する深い愛情を、彼女は生涯持ち続けた。自らの信念と奉仕の精神を高鳳京は同志社大学留学時代に育んだのであり、後にその経験を生かして、祖国での女性高等人力の教育事業を実践に移した。彼女の生涯は、開放的な民族意識と普遍的な人類愛を結合できた韓国の代表的な先覚者的女性知識人として、韓国人のこころのなかに深く刻みこまれている。

高鳳京

- 1909 黄海道に生まれる。
- 1918—1922 京城公立第一高等女学校（現 京畿女子中高等学校）在学
- 1924 同志社女学校専門学部英文科予科入学
- 1928 同学部英文科卒業
同志社大学法学部経済学科入学
- 1931 同学科卒業
ミシガン大学大学院（～1935）Ph. D. 取得
- 1935—1945 梨花女子専門学校教授
- 〔 1942 嬰児館
1943 京城姉妹院家庭寮を開設 〕
- 1946 保健厚生部婦人局初代局長に就任
政府文教部学術院社会科学分科委員。大韓オモニ会会長。少女団(ガールスカウト)会長。大韓赤十字組織委員。文教部教育政策審議会委員長その他を務める。
- 1958 ソウル女子大学・初代学長
- 1985 ソウル女子大学・名誉学長
- 1997 同志社女子大学名誉文化博士の称号を受ける

同志社カレッジ・ソング

麻田貞雄
(大学法学部教授)

日米比較の観点から

最近ゼミのコンパで、今ひとつ盛り上がりや欠くのが気になる。十数年、二十年前までは、お開きのとき、必ず「ワン・パーパス」でピシッと締めくくったものである。ところが近年になると、こちらが歌詞をコピーして持参しないことには、まとも歌えるゼミ生はほとんどいない。昔なら、全員輪になって、別嬪のお嬢さんときゅっと両肩を組んで高唱したものだ。そのころは「セクハラ」という言葉はまだなかった。

私は同志社中学一年生のときから、わがカレッジ・ソングに大きなプライドを抱いてきたし、今でもそうである。高校一年生のとき、校長の加藤延雄先生が突然の英語の時間の代講で、カレッジ・ソングの歌詞をスラスラと(何も見ずに)板書して、翻訳・説明されたのが印象的で、「四節までマスターしてやろう」と一気奮発したのを覚えている。

さて、一外交史家として興味深く思うのだが、わが「ワン・パーパス」には時代の跡が深く刻まれている。二節はこう歌う。「戦雲がその暗き恐怖をもたらすとき、幾万の愛国者は武器を取る。しかし、われわれは長き平和の月日のうちに、祖国の名と名声を高めんとする」。誠に立派な平和主義の思想である。また、四節目ではこう続く。「我らの生国よりも、世界が一つであることを、われわれは学んだ」。世界同胞の精神が流れている。このように崇高な歌詞をもつ大学校歌が、世界広しといえども、ほかにどこにあるうか。

「ワン・パーパス」はイェール大学の校歌に倣っているのだが、かつて一八九八年の米西戦争のとき、イェールの総長、教授、学生たちは「For God, for Country, and for Yale」と大合唱しながら帝国主義への道を行進していったという歴史がある。

これと対照的に、わが、カレッジ・ソングでは偏狭な愛国心を排し、人類の平和を志向しているのである。この崇高な理想に貫かれた「ワン・パーパス」と比較すると、イエールの校歌は、無邪気そのものである。「愉快さに溢れる輝かしい学生時代、人生のもっとも短い、そしてもっとも楽しい年月。何と早くそれは過ぎ去っていくことか！だが時間と変化は、イエールで結ばれた友情を壊してしまうことは決してない」。

私の母校の一つであるイエール大学の名誉のために言ってきたのだが、この単細胞の歌詞は、イエールだけに限られたものではない。プリンストン大学の校歌(“Old Nassau”)をみよう。「みんなの心と声を合わせて、心配事など忘れて、みんなで『古いナッソー』を賛美しよう。マイ・ボーイズ、フレ、フレ。『古いナッソー』のためチアーを三唱！」こう訳してみると、身も蓋もない。では、天下のハーヴァードはどうか。「麗しきハーヴァード」は一八一一年、創立二百年を前にしてつくられた校歌で、伝統的なアイルランドの曲で歌う。「麗しきハーヴァードよ、汝の息子たちは二百年祭に集い、過去から将来へと、祝典の儀式を通じて祝福に身を委ねる。記憶を久しく暖かく伝えてきた立派な先祖たち。荒れ地に咲いた最初の花よ、彼らの夜に輝いた星よ。変化と嵐を越えて静かに立ち上がる」。どうも、詩的とは言いかねる直訳だが、ハーヴァードの校歌ですら、この程度の歌詞なのである。

では、アメリカの校歌はみな低調なのかというと、かならずしもそうではない。同志社の姉妹校アーモスト大学の校歌(と同時に、同志社アーモスト館の歌)は、実に軽妙なメロデー

で、Lord Jeffery Amherstの生涯を歌いあげる。アーモスト男爵はイギリスの士官。一七五八年アメリカに起き、フレンチ・アンド・インディアン戦争で大活躍。彼の遺徳を讃えて、アーモストの町も、大学も名づけられた。しかし、彼はアーモスト大学の設立者ではない。

創立者の偉業を称えた歌として、わが同志社には「同志社校歌」がある。「校祖は海外雄飛渡米して 苦学十年人の子を 神の像に育てんと 早くも思い立たれり」。ハーヴァードですら、その創立貢献者ジョン・ハーヴァードを讃えた歌がないのと対照的である。アメリカの大学の校歌が低調であるというよりも、同志社の校歌がひとときわ立派というべきであろう。しかし、かくも崇高な校歌をもっているからには、それに恥じないだけの思想と行動、教育と研究をわれわれは世界に向かって示さねばならない。かつて、私の元同僚の小野哲先生(名誉教授)は、ある論文の最後の締めくくりとして、「自分の政治学のエッセンスは同志社カレッジ・ソングの中に唄われている」と大書された。そのときは「変わったことを書く先生だな」と思ったものだが、いまや私も、当時の小野先生の年齢になってしまった。先生のお気持ち分かるような気もする。

しかし、それにしても、同志社の諸校歌は、「最後のピューリタン」にふさわしく、いささか訓辞的で、道徳的で、堅苦しいとの印象は否めない。その点、アーモスト大学に、“Amherst Drinking Song”と“Come Drink a Toast to Amherst”の威勢のいい酒杯の歌が二つもあるのは、たしかに注目し値する。十九世紀にはピューリタンの道徳的砦であったアーモストも二

十世紀に入ると、これだけくできてきたのだ。二十一世紀に突入しようとする現在、わが同志社に祝杯の歌の一つや二つあっても、けっして学校は潰れないと私は密かに思うのだが。

ところで、校歌ではないが、学生生活を謳歌した歌として、イェール大学の「イーライ・イェール」がグリー・クラブの十八番である（イーライというのは、イェールの創立者 Elinu Yale の愛称）。

「一年生のとき、イェールにやってきた。試験づけて真っ青になっちゃった」。

リーライ、イーライ、イラーイ、イェール（以下繰り返し）
「二年生になって、くつろいでシガーを吸ったり、グリー・クラブで歌った」。

「三年生のとき、恋をして、彼女のハートを切り裂いた」。

「そして四年生では世慣れして、良い友達をつくり、勉強した一少しはね」。

「一番悲しいお話は、古いイェールにおさらばを告げるときでした」。

これを同志社風に書き直してみると、「一年生のときは、受験ほけと五月病でボケーとしていた。二年生のときはアルバイトに追われ、三年生のときはゼミで勉強一少しはね。そして四年生のときは就職活動でくたくた」。これでは、残念ながらグリー・クラブの歌にならない。

イェール大学のグリー・クラブのレコードを、ヴォリュームをあげてかけながら、酒杯を重ねて書いているので、いささか脱線してしまっただけ。閑話休題。アメリカの大学の校歌をいろいろ

ろみてきたが、歌の数からいうと、同志社は圧倒的に多い。『同志社歌集』（一九六九年）によると、「ワン・パーパス」以下、全部でなんと四十もの歌がある。「世界一多い」とギネス・ブックに記録してもらってもよからう。

私は岩倉の住民なので、やはり大成寮の寮歌が好きだ。「緑も深き洛北に」で始まり、「ああローマの古きより 築き立てたる先人の 文化の偉業進めんと 学びの海に船出して」と、世界的にスケールが大きい。いまでも歌われているのだろうか。旧高等商業学校の歌には、「ここ岩倉の 原野に立ち 維新の偉業を画せし人の いさおをしるのびて 第二の維新」とある。「白鷺飛び交う 岩倉の野に 清らかに立てり 我らが母校」―これは母校、同志社高校の歌だ。

我田引水的に岩倉の話になってしまったが、私が強調したかったことは、たいへん立派なカレッジ・ソングなのだから、われわれは機会あるたびに、もつとしばしば歌うべきだということである。単に入學式、卒業式で聞くだけの歌であっては断じてならない。一年生の英語の時間に「ワン・パーパス」の歌詞を覚えさせてはどうか（ちょうど、私がアメリカの大学一年生のとき、チャョーサーの『カンタベリー物語』の導入部を暗記させられたように）。同志社カレッジ・ソングが忘れられるときは、同志社精神が減びるときだと銘記しておいたほうがよい。